

通信



一関市大東町大原の山吹欄田

●小さくても光り輝く地域からの発信

「ハイキューさんが町にやって来た」 岩手地域総合研究所理事、元軽米町役場職員
江刺家 静子 さん

●連続講座「岩手の再生」・岩手県社会保障学校第5回講座

講座 「社会保障・社会福祉とは何か」— 歴史、原理、政策、運動の4つの視点から—
講師 岩手県立大学名誉教授 佐藤嘉夫 さん

●地名の話—7

高橋 宏壽さん

●植物の紹介

清代 正晴さん

NPO法人
岩手地域総合研究所

岩手県盛岡市中央通二丁目8番21号 Mホール
Tel・Fax:019-624-6715
メール:i-chiikisouken@salsa.ocn.ne.jp

目次

- 表紙写真・記事 写真・記事：事務局 1P～2P
- 小さくても光り輝く地域からの発信 3P
「ハイキューさんが町にやって来た」
岩手地域総合研究所理事、元軽米町役場職員 江刺家 静子 さん
- 連続講座「岩手の再生」・岩手県社会保障学校第5回講座 4P～7P
講座 「社会保障・社会福祉とは何か」
— 歴史、原理、政策、運動の4つの視点から—
講師 岩手県立大学名誉教授 佐藤嘉夫 さん
- 地名の話—7 高橋 宏寿さん 8P
- 植物の紹介 清代 正晴さん 8P



表紙写真

一関市大東町大原の山吹棚田

一関市大東町大原山吹地区の山裾、標高400メートルほどの中腹に位置する「山吹棚田」は、山の南側斜面約2ヘクタールに、40枚ほどの田が階段状に並んでいます。

山吹棚田米生産組合の皆さんが大切に守ってきた棚田は、平成11年に農林水産大臣が認定する「日本棚田百選」に選ばれ、百選中東北の棚田です。

遠くには、美しい台形の霊峰室根山を望むことができます。

ここにいと四季折々、朝夕の繊細に変化する風景と音、匂い、五感で感じることができ、すべてそのまま素直に受け入れることができそうに感じます。

小さくても光り輝く地域からの発信

「ハイキュー」さんが町にやって来た」

江刺家静子さん

(岩手地域総合研究所、元軽米町役場職員)

岩手県が発表した県内市町村の将来人口(推計)によると、軽米町は本年4月1日、8,843人、2040年に、5,177人、41%減という見通しでした。信じたくない数値ですが、毎月、町広報に掲載される慶弔欄や、町の通りは、朝夕の通勤通学の時間帯を除くと人も車もどこかに消えたか錯覚しそうになる状況だから、大きく外れていないでしょう。

最近、町の話題二つ・・・①山林を伐採しメガソーラー9サイトで382MWにむけての工事がすすんで、山肌が剥き出しとなり、雨が降ると土砂崩れ大丈夫かなと心配の声②「かまのまい交流駅(仮称)構想」は図書館・公民館・バスターミナルをセットにした施設をつくるというものです。①は山林の作業ができない②は人口が減っていくのにこの施設計画は見直したほうがいいなど、どちらも人口減に関係しています。

こんな町に3年ほど前から、ゴロゴロを引いた若い人たちが来ます。ゴロゴロとは「キャ

リーバック」のことで、「高校通りにゴロゴロを引いた人たちがいる。ハイキューさんたちだね。」「ハイキューさん川原に居た。金髪だっけ。」と情報が交わされます。

古館春一さんの漫画「ハイキュー!!」(高校男子バレー部の物語)の「聖地めぐり」といつて軽米を訪れる人たちのことを「ハイキューさん」と勝手に呼んでいます。

2年前、町民有志でふるさと応援隊「わ・か・る・まい」を結成し、おもてなし活動をしています。基本理念は、軽米の魅力って「わっかるまい(知らないだろう)」、軽米の魅力を知れば「和かるまい(軽米を通じて仲良くなり)」、「軽米を愛する仲間が繋がって「輪かるまい(軽米を愛する人の輪を広げる)」です。聖地巡礼マップをつくり、聖地巡りの注意事項などもブログで紹介、特産品や食事の場所、宿泊など、都市と状況が違うので案内が必要です。

ハイキューさんは、国内だけでなく、中国、韓国、台湾、タイ、インドネシア、遠くはアメリカ、フィンランドの人も来ました。何十回と訪れているリピーターの方たちは、夏祭りや秋祭り、町のイベントの手伝い、案内所の留守番をしてくれたりします。

「こんな何もないところによく来るね」というと「そこがいいんです」と言う。きっかけ(郷土食)パーティーをしたり、コスプ

レの着替え場所を提供したり、こたつのない国から来た人には「こたつ」のあるお宅であったまる経験もしてもらいました。

漫画の登場人物名は「国見くん」「金田くん」「岩泉くん」など地名がついていて、金田一温泉に泊まり、岩泉町を訪れるコースで来る方も多く、ハイキューつながりで交流も多くなっています。

「ハイキューで元氣もらいました」という若い人たちは、すぐに友達になります。

軽米高校の文化祭には、校舎内に入れるチャンスなので、全国からファンが訪れます。校長先生とも交流し、小さな高校の文化祭、合唱発表に「感動で涙が出た。」と言った若者もいました。ことしの文化祭は、海外からも日程確認のメールが来ているとのこと。

ちなみに軽米高校は、女子バレー部のみで、部員女子4名、男子2名はマネージャー。試合は伊保内高校との合同チームで春高試合に出場、第1試合・第2試合勝利し、第3試合で敗れましたが、さわやかに頑張りました。

国内のみならず外国からも軽米にお客さんが来るという予想もしなかった事態に驚いています。もしかしたら、軽米に住みたいという人が来て(現実に声はある)、人口減少が緩やかになるかもしれないと期待しています。

連続講座「岩手の再生」・岩手県 社会保障学校第5回講座

4月15日(日)午後1時30分からアイーナ7階に於いて、連続講座「岩手の再生」・岩手県社会保障学校第5回講座が開催されました。32名が参加しました。

以下、講座の模様を事務局でまとめたものを報告します。

「社会保障・社会福祉とは何か」
— 歴史、原理、政策、運動の4つの視点から —



講師
岩手県立大学名誉教授
佐藤嘉夫さん

はじめに

今日は今までやってきた講座のまとめ的なことなのですが、もうちょっと社会保障全体を概観した場合にどんなふうに考えたらいいかというようなことを話します。

社会福祉・社会保険・社会サービスについて

社会保障全体で私が今日みなさんに申し上げたいのは、社会保障と社会福祉ということですが、もうひとつ外側の概念として社会サービスというところで、ここでは教育と住宅と公共交通の話があります。社会保障とその中にさらに社会福祉がある、これらは重なり合っているという意味ですね。生活保護と介護保険だけは福祉と社会保障のところにまたがっていますが、こういうものが全体として私たちの生活を支えているというふうに考えています。

3つを全体として見る

どうしても社会保障を考えたときに国民負担が先進国みたいにかかからないのは、日本は政府も金を出さないけれども、国民の負担だつて低いじゃないかという議論を盛んにするわけです。

現代の勤労者の生活は社会福祉と社会保障と社会サービスという3つから私たちの生活は支えられているというのが当たり前の形なのですが、どこかひとつだけを見るのではなくて、いずれは全体として見ていかなくちやいけないということなのです。

日本の現状

こういうものは、どういうふうな理屈で成り立っているかということで、日本の現状と

いう話ですが、社会サービスは公的な整備、公共交通なんかもそうですが、多くは整備はするのですが民間市場でやっていて、多くの国民が共通に利用しています。教育の場合と交通の場合ではちよつとお金が変わりますが、



教育の場合は直接的なサービスで教育費そのもの、義務教育なんかは直接国が出している、高等教育についても非常に額は少ないですが、大学の国公立はほとんど税金です。私立大学でも3,200億ぐらい出ているわけです。それでも基本は市場サービスです。

社会保障は医療と年金を想像してもらえばいいですが、例えば国保なんか今後都道府県に移行した場合にも継続する部分があるわけですね。だから税金と保険料、それは社会保険という仕組みなのでどうしてもあらかじめ予定しているものに対して防御するというのが社会保障の考え方なので、何が起こったときにどれだけのものを出しますよと、年金ならば老齢年金とそれ以外の障害年金とか母子年金では違いますが、あらかじめ決められているわけです。

社会福祉は一般財源と介護保険が始まったので社会保険というのが組み合わせられているわけです。必要性に対して給付されるということですから、そういうサービスも現物給付ということですから、介護保険法はお金を給付するということになっていくのです。だから、介護が必要になったときに介護が必要になった人にお金を給付する。だけどそのお金はサービスを提供する人に支給する。本来、家族に支給する、本人に支給するはずのものなのですが、代わりに代理者としてサービスを提供した人にお金を払うという仕組みになっていて、こういうのも珍しいのです。お金を払うというのはどういうことかというところ、お金を保証してあげるのだから、あとはサービスを自己責任で市場で買いなさいという。だからサービスそのものを公的責任でやるという考え方が最初からないのです。

社会保障や社会福祉の社会全体に対してもっている意味

(国民生活の安定・安心の確保)

社会保障や社会福祉の社会全体とか国全体にとつてどういう意味があるかということですね。私たち勤労者の生活の安心の確保ということなのですが、現代社会において誰でもここまで最低限保障されるべきであるという

国民の共通の水準、ここがちゃんと目標にできるかどうかということが社会保障の一番重要なことなのです。

ナショナルミニマムをまず基準にするということ、それによって私たちの生活を底支えして、普通の生活が確保できて安心、信頼が生まれ、そのことが経済的な効果を生むということなのです。

(所得・財・サービスの再配分機能)

2番目は再配分機能、国民生活の公平と平等化ということですね。所得の高い人に重い負担をしてもらって、低いほうへ分配する。累進課税とか社会保障の定率負担というのもそうですが、社会保障という仕組みを通して、高いほうから高い税金を取る。いずれにしても社会保障を必要な人たちにさらに分配することによって少しでも格差を取り除いていくということですね。

(社会的生産力の確保)

それから、社会的生産力の維持ということですね。これは最近ライフ&ワークバランスと言われている。社会保障があつて初めて私たちが安心した普通の暮らしができるのです。

例えば子育ての問題が典型ですが、途中で仕事を辞められるという、介護のために辞め

る人は相変わらず13万人ぐらい1年間にいますが、そういう人たちは中堅の人たちなので、そういう人たちが辞めるということは社会にとつて非常に大きな損失なのです。ですから、そういうものをうまく社会保障で支えることによって社会に貢献してもらうということですね。

(社会や個人を束ねる福祉的価値の増進に寄与)

4番目が、社会や個人を束ねる福祉的価値の増進は、結いとか助け合いとか連帯とかいろいろ出てきますが、そういう様々な考え方に私たちがどこまで共感するかによって社会保障の形が違ってくるわけです。ただ、こういう言葉にはいつもメリットとデメリット、政府の思惑と国民の考えというのが同じ言葉を挟んで対立する構図になっている。だけどこういうものがなければ成り立たないということも当然なのです。ボランタリズムとかチャリティとかいろんな言葉がありますが、そういうのも大事なのです。

社会保障や社会福祉は人間は競争して自分のことだけ考えて生きていくのではないんだよということを通の気持ちとして、今そういうものの見方と考え方を定着させていくという大事な役割があるわけです。

(社会保障はセーフティネット)

社会保障はセーフティネットということ、人生の中で起こってくる様々なものに対して網を張っている。リスクに対して網を張っている。最終的には生活保護があるということ。

社会保障とGDP

高齢者の社会保障や年金や福祉に対する拠出金、国が制度の中で払っているもの、公的な支出や医療費に対する支出はGDPの何%に当たるかということ、を外国と比べると、日本だけが高齢者に余計に金を出しているとか医療費に金を出しているというわけではありません。ただ、国家の財政と比較すると比率が高いという話になるわけです。どこまで戻って議論するかということなのです。

歴史を振り返る

次に歴史の話をちょっとしてみたいと思います。何で歴史の話をするかというと、歴史的にたどってきたことは繰り返されるといふひとつの意味があります。もうひとつは、歴史が積み上げてきたもの、そこにひとつの倫理とどうか、歴史的につくられてきた考え方があるということなのです。

社会保障とかを考える場合、近代以前の社会の場合には、何で社会福祉がほかの社会保障と違うというように考えられるかというと、社会から脱落した人、排除された人たちに対する施しとか哀れみとか、こういうことで社会の仕組みとは関係なくという意味もあるのです。かなり古くからあるわけです。それは主に宗教家たちがやったり、教会とか寺院などが取り組んできたわけです。宗教的信念に基づく篤志家などのチャリティ、慈善活動が行われるようになった。日本でも江戸後期の秋田の観音講、旦那様方のお金がある人たちが講を作って子どもたちの救済活動をやった観音講についての研究もいろいろされています。こういうものは歴史的に非常に古いのです。

社会保障の原理

これは、いろいろあとで変遷はあるのですが、社会保障の原理ということ、現代国家には、生存権という権利として国民的最低保障があるということ、生存権の承認と国家責任と国民的最低保障、最低保障は年金でやるのと同時に公的扶助という生活保護をもう少し使いやすい最低保障の仕組みにしていくかどうかということ、です。

それから、全国民を対象に社会保障制度が充実していくということは、医療保険なら医

療保険は全部の国民に広げていく、年金なら年金を広げていくということ、もうひとつは分断をしないという、全国民を対象にというのが原理のひとつとしてあるわけです。

社会保障が機能する前提

それから、社会保障が機能する前提としては、どうしても社会保険という仕組みが基本になっているので、雇用、雇用関係が安定していること、全国民を対象にしていくということ、ですから、所得、地域、世代ごとの格差が大きくないこと。

社会保障や政府に対する信頼が高いこと。それから、権利性が明確であること、制度がわかりやすいこと、社会保障が私たちの手元からどんどん離れていくのは制度がわかりにくいということ。それから、相談に乗ってくれる人が身近にいること。あとは、社会保障の理解が進んでいることです。

社会の富の分配・分布

社会保障の目的は、所得の低いほうに分配をしていくということなのですが、分配したあとにどのぐらい平等性が改善されたかという話です。ジニ係数というので計るのです。ジニ係数が何%改善されたかというOECDのデータを見ると、日本でも再分配すると再分

配される前より少しは改善されているのですが、OECDの平均や北欧の場合と比べると低い。

ジニ係数は高いほど不平等度が高いということで日本は先進国の中では最低に近いほうで、日本から後ろのほうはイスラエルとかトルコとかメキシコとかアメリカがあります。

上位10%の人の平均所得が一番下の10%の人の何倍かというのを見ると、日本は80年代には7倍、90年代は8倍、2013年には10.7倍になった、OECD平均だと9.6倍ということなんです。こういうふうな格差が広がっているという話です。

政策的な国民の分断を許さない

もっと広い問題は教育とか医療で、医療でも子どもの医療の問題は何で高齢者の医療の問題と違うのか。子どもの医療の問題も高齢者の医療の問題も大事なんです。ところが、国のほうが一生懸命旗振ってみんなが子どものほうに目が行くようにということもあるわけです。だから、そういう分断を許さない。かつては高齢者の医療の無料化をやっていたけどどうなったんだと、それは全くとご破算なんでしょうかという話です。

そういう共通の課題を取り出していく、政策的な国民の分断を許さないということ。費

用や財源の削減だけではなくて、一面的な共同や共助意識を涵養し、人々の対立をあおり、分断して支配する手段として利用されることが多い。社会保障政策は国民の生活全般にかかわるので、国民をうまくコントロールして支配する手段として政策的な戦略を出して行くということなのです。

だから、自治体や地域に責任を押し付ける地域的分断、費用負担による低所得者と高所得者の分断、これは何で低所得者だけ減免されているのかと、高い人たちは同じサービスを受けているのにという話になるわけです。

それから、年金とか医療について労働者と非労働者の分断、大企業と中小零細企業の階層的分断、これは健保組合とか協会けんぽとか国保組合もあります。それから、年齢による給付要件、費用負担の差別化による分断、高齢者でもどういう根拠があつて65歳、75歳という医療制度が分断されているのかという話です。

だから、分断されると分断されている人同士がお互いのところに目が行くのでほかのところにも目が行かないわけです。すべての国民に平等にサービスが提供されるべきである、すべての国民を対象にした共通の制度をつくるべきだということなんです。ここはもっとみんなで声を上げて医療保険こそ全国民共通にす

べきだというふうに私は思います。

おわりに「中範囲の理論について

マートンという人が個別の事例と抽象的理論との間の橋渡しとしての「中範囲の理論」の必要性を唱えた。中範囲ということが、とくに社保協とか地域の中で我々が取り組むべき課題なのではないかということなんです。個人や個別の問題への共感や関わりが出発点ですが、地域や特定集団など一定の広がりでの共通認識、理解、共通課題を共有していくということが運動と闘いの場面、共同と連帯をつくりだしていく、中範囲の課題というものを摘出して実践運動をして感じたことは確信につながるので、確信をもつということが長く私たちが物事を批判し続けられるということだし、自分の信念が揺るがないということなので、こういう仲間を増やしていくというのが中範囲のところややっていくということが大事なんじゃないか、そのことが社会保障の制度や政策の改革につなげていくという話なのだと思います。

地名の話ー7 高橋 宏壽さん

おうしゅうかいどう 【奥州街道】紫波町二日町

『ロングフェロー日本滞在記』明治四年(1872)一〇月二〇日(金)の日記です。

今日は花巻まで二四マイル(38.6km)をあるいた。幅三〇フイート(9.2m)の道は平坦で矢のように一直線、両側にびっしりと松並木が続いていた。街道というよりむしろ公園の並木道のようにだ。おそらく三百年前に家康が東海道を建設したところに造られたものだろう。この松並木は東海道と同じくらしいの樹齢に見える。両側の盆地には五マイル(8km)離れた山まで、一面に黄色い稲田が広がっていた。北上盆地というのは、今日見たかぎりではきわめて豊かな土地のようだ。昼食は郡山という稲田の上に聳え立つ奇妙な丘(二日町山子か)の上の村でとった。周りには美しい景色が広がり、気持ちのよい天候が続く。われわれは秋よりも早く、南へ下っているようだ

芭蕉の『笈子の小文』にも、

行く春に 和歌の浦にて追い付きたり

という句があり、南北にむかう徒歩の旅は、季節の移りと競い合い、天と地の間の俯瞰図のようです。

また『宮本常一著作集43』は、

東北地方ではアカマツが多い。そしてそれが、盛岡から北、とくに青森県にはいつてからはかなり多く残っている。夏になると、深緑一色に染まってしまいう東北地方の山野に、アカマツの並木があるのは何か心の救いになる。とくに斜陽が、その幹に射している道を歩いていると、澄みきった空とともにほつとした暖かさと哀愁を覚えるのである。そして、人びとの風景演出の、心の細やかさに感動せられる。

と述べている。では、小生も一句、名利に松の並木や紫波の町



かつて二日町の奥州街道(国道四号)にあった藩政期の松、姿が美しくかつ

筆者略歴 昭和三五年岩手大学文学部卒業 安代町・盛岡市・花巻市の小学校に勤務、平成九年退職する。

アサザ(浅沙)

ミツガシワ科アサザ属の多年草。ユーラシア大陸の温帯地域に分布し、日本では本州や九州などに生育する。浮葉性植物で、地下茎をのばして成長する。

黄色の花を咲かせる。5枚ある花卉の周辺には細かい裂け目が多数ある。

葉は濃緑色で光沢あり。2週間くらいで生え換わる。ヨトウガやマダラミズメイガの幼虫の好物で1〜2日で葉が穴だらけになる。このことを利用して水中のNやPの除去に役立て、環境保全への取り組みが行われている。

環境省レッドリスト(2012)では「準絶滅危惧」になっている。

撮影地は、盛岡市下太田下川原霰石川河川敷です。



撮影者：清代正晴さん